

著者の意圖する唯物論的課題を覆へずに至りほしまいかとすら感ぜしめられるからである。併しこのやうな問題は何れ眞摯なる氏の今後の努力が解明してくれるであらうことを信じて疑はない。それは兎に角右の紹介に依つて大體察知されるであらう如く、この書は如何なる立場に立つ人と雖も、一讀されて然るべき好個の著作である。(政經書院發刊・定價參圓・酒井康彦)

雜 錄

デイルタイの教育學(全集第九卷)

大學を出た青年が學校の教師になるとする。手に負へない悪童共にとりまかれ、彼等を指導、統御しなければならぬ。それは研究室の學問的な努力とは全く別の世界である。自分が黒板に向つて坐つた頃を回想し、習つた最もよき先生の模倣をする。だがそれでは新しい生活の種々な任務を果すことは出来ない。職務に嫌惡を感じ、出来れば、大學時代の研究を続けたいと思ふ。自分は學者であつて、教育家ではないと感じる。教師としての職務に少しも喜悅を見出さず、活動力を全く失つてしまふ。短い期間の訓練と些少な知識で、巧に兒童を扱ふ小學教師を羨望さへする。これでは教師としての職務は果されない。又こんな生活はその人の不幸である。

勿論、大學は特殊な、専門的な、學問的研究のなされるころである。それによつても、教師に要求される専門的知識は授けられるだらう。併し、それだけでは足りない。先づ第一に、全人格を教育家として作り上げることが必要である。語の固有な意味に於ける師範教育である。人の師たるやうに訓練することである。教育學の歴史と體系、それは大學としては是非授けねばならぬものである。併し、實際に於ては、この方面の努力は存外等閑に附せられてゐる。教育學の基礎をなす心理学と論理學とは勿論のことである。教育の歴史を通じて得られた經驗、經驗に基いて立てられた理論、教育學の主要命題、それらの知識は缺くことを許されない。教師としての知的準備には、教育制度と教育學說、特に近代のそれ、現代有力な教育論を習得しなければならない。

教育學の講義はデイルタイにとつて最も好ましいもの、一つであつた。又、彼はギムナージウムの教師としての經驗もある。教育學の基礎としての心理学には、獨自の見解をもつてゐる。教育學の講義には決して不用意ではないといつてゐる。既にパーセル時代、一八六八年教育學の講義を豫告して果さなかつたが、プルストラウ時代には、一八七四年の夏、七四―七五年の冬、七八―七九年の冬學期と前後三回に亘つて講じてゐる。ヘルリン時代には八四年の夏から九四年の夏學期まで、毎學年、夏には「教育學の歴史と體系」を、冬學期には心理学の講義の補足として「心理学の教育學への應用」を講じ、兩者は不可分の一つの全體をなしてゐた。

多年の研究の中、公にされてゐるのは、全集第六卷に收められた（又單行本としても出た）「普通妥當的教育科學の可能性に就いて」のみである、併し、この論文は、或る特殊な問題を取扱つたものであり、他との聯關から切り放され、ディルタイの考へ全體は到底それによつては知られない。新刊の全集第九卷は、その包括的全體を傳へようとする。その基礎となつたのは、ベルリン時代の講義であるが、プレスラウ時代のものも大部分加へられてゐる。（プレスラウ時代には、國民の生全體に於ける教育の意義が優位を占めるのに對して、ベルリン時代には、歴史への沈潜が顯著な傾向としてあらはれてゐる。）

學校用の教育史は年々作られるが、一層深い聯關に於ける教育の歴史は一向明かにされてゐない。優れた歴史家ディルタイのこの方面に於ける貢獻は確かに大きいものに相違ない。加之、ディルタイその人の内的發展に於ても重要な地位を占めてゐる。彼にとつては、「總ての眞正の哲學の精華と目標とは、最も廣義に於ける教育學、即ち人間の教育に就いての學說である」これは、彼の精神科學の地盤から成長した生の哲學の必然的表現である。はたらく意志の哲學は、窮極に於て、教育學と合體しなければならぬ。しかもそれは、前述の興味と自信とを以て述べられたのである。尤も、この講義は哲學的には決定的な成熟を示してゐない一八九四年で終つてゐる。併し、教育學的研究は終生續けられてゐた。それから、彼の「獨逸精神史の研究」の計畫が生れ出た。それは、獨逸精神をゲルマン的起源から全體的に論述することであ

つた。その一部である全集第三卷及び「獨逸詩及び音樂考」に於ては背景に現れてゐないが、「教育」はこの研究の中軸をなすべきものであつた。

既に前掲の論文に於いて斥けたやうに、教育の諸問題を或る原理から解決せんとする、總ての民族と時代に「普通妥當的な教育科學」は十七世紀思想の遺物である。普通妥當的なものは、たゞ少數の命題のみである。歴史的に力ある教育學の體系はそれ以上のものを含んでゐる。教育は常に民族と時代との制約を受けてゐる。異なる民族の教育體系の分析によつて、その都度歴史的國民的なエートスに即した教育が見出される。即ち、我が國民と我が時代の本性から、今日の教育者と今日の學校組織との具體的な完全な理想を引出すべきことを教へる。併し、この國民的なエートスに科學的精神が常に對立する。それは普遍的なものへの意志である。併しこの對立は窮極に於て、生と思惟との關係といふ生の哲學の根本問題に歸する。

體系的部門に於ては、教育の現實性の統一的全體への復歸、總ての理論以前に、教育活動が現實に營まれてゐる地盤への復歸が提唱される。教育學の二つの部門への、即ち、倫理學に依存する教育の目的論と心理學に依存する教育の方法論への傳統的なしかも悪しき分裂はもとより斥けなければならない。この教育の現實性に於てはたらく諸力の分析によつてのみ、それらの根源に於て統一的教育學說が展開されるのである。

教育の背後には、人間性の完全性といふ大きな祕密が隠されて

ゐる。人間性は教育によつて益々よくなるであらう。教育によつて人間性をそれに相應はしい相に形成することが出来る、と考へることはひとを恍惚ならしめる。このことは、我々に或る未來のより幸福な人類への展望を開く。かゝる十八世紀的な思想は、今や完全にその地盤を失ひながら、しかも永遠に人類と共に残るのではなからうか。

Wilhelm Dilthey's Gesammelte Schriften. Bd. 8: Pädagogische Geschichte und Grundlinien des Systems. Lpz. u. Bln.: Teubner. VII, 240 S. geb. M. 10.—

完全なるニーチェ（全集の發刊）

現在我々を強力に揺り動かしつつあるものを、時代に先んじ、自ら進んで経験したのはニーチェである。併し「破壊」と「建設」とは相即するものである。古き傳統の顛落は未知の領域への展望を開く。それによつて、新な學問的方法と生活態度が起る。現代は意識的にせよ無意識的にせよ、彼の生の創造を追體驗してゐる。彼の諸觀念に對してのみならず、それらを天才的に創造した人間に對する關心は、益々多様に、熾烈になりつつある。即ち、彼の哲學と生活との全體の認識が要求される。

もはや、ニーチェの著作に就いて、一を採つて他を捨てることは許されない。個人的な趣味からの、或は一定の讀者相手の選集は、その存在の權利を失つてゐる。哲人の漸く覺醒しつつある精神の試論から、彼の破壊の傷しき證據に至るまで彼の全體が、仕

事場に於てありしまゝの姿で呈示されなければならない。それによつてはじめて、彼の哲學說に對する學者的關心のみならず、人間ニーチェに對する愛と畏敬とが、その充實せる對象を見出し得るのである。だから、他の著者の批判的出版に於てのやうに、信賴すべきテクストを學問的に正確に、確定するだけでは足りない。「歴史的・批判的全集」は完全なるニーチェを示し、彼の著作と人格との生成に對する興味をも、充分に満すものでなければならぬ。

かくして先づ前景に現れるのは若きニーチェである。彼の多面的な才能と努力とは、彼の精神が芽生へた文化・感情の世界と共に現れる。ニーチェが未だ完全に精神的獨立を示さなかつた時代の勞作、例へば學校時代の作文も採り入れられてゐる。

次に、文獻學者としてのニーチェが現れる。彼は十年間パーゼル大學の古典學の教授であつた。この時代のものには、講義の外に、多くの文獻學的研究が残されてゐる。そしてそれらは文化の批判者、哲學者としてのニーチェに基礎的な重要さをもつものとなつてゐる。(例へば、ハイテッカーの「獨逸大學の自己主張」に現れたニーチェ的なものを見よ。それは、所謂古典時代以前の希臘的なるものに直接に連つてゐるではないか。)しかるに、ニーチェ自らによつて或は後人によつて公刊されたものはその一小部分に止つてゐる。併し總てはフェルルスター・ニーチェ夫人の賢明な醜態によつてニーチェ文庫に收載されてゐた。それらの全體が今、はじめて日の光を見ようとしてゐる。それ故、新しき全集はニーチェ

文庫そのものであるともいへよう。

今度刊行されるニーチェ全集の編輯は、エリザベート・フヘルヌター・ニーチェ夫人の協力の下に、ニーチェ文庫の學術部委員會の手に委ねられる。委員長はイエーナのエムゲ教授。著作とそれに附屬する遺稿と書簡との二部に分たれる。前者に於ては、完成せるもの、外に、總ての未完の草稿が、出來得る限り正確な時代順で、分類されずに收められる。文獻學的な専門的研究は、或は時代順に、或はそれらを基礎とする後の著作と共に排列される。尙ほその成立を示す後書も附せられる。ニーチェは優れた書簡の筆者であつた。本全集はその現存する全部を、年代順に收める。又その理解に必要である限り、返答をも附録として入れる。各卷五〇〇頁のもの四十卷に達する豫定である。最初に刊行されたのは少年期の著作一八五四—六一年、六一—六四年の二卷である。豫約價は各卷、假綴一二、布裝一五、背革裝一八馬克である。尙ほ分賣はしない。

Friedrich Nietzsche:—Werke u. Briefe.—Hist.-Kritische Gesamtausgabe. Minch. u. Bln.: C. H. Beck.

新刊書目

Barth, K.:—Offenbarung, Kirche, Theologie. (Theol. Existenz heute, Hr. 9) Minch.: Kaiser. 43 S. M. 0.80

Brunner, E.:—Natur u. Gnade. Z. Gespräch mit K. Barth.

Tüb.: Mohr. 44 S. M. 1.50

Magistri Eckardi Opera Latina sub auspiciis Sanctae Sa-

binae. Hrg. v. Rektor Sanctae Sabinae P. Gabriel Thury

u. Dr. Raymond Kiliansky. Rom: Institutum Historicum

S. Sabinae.

ヘックハルトの羅甸文著作集の刊行に就いては、既に石原謙博士が文化第一卷第二號に述べられてゐるが、獨逸書店の案内によれば、最近その第一冊 Super Oratione Dominica が出たやうである。(價格二馬克半)尙ほこの著作集は十五冊から成り、四年間に完成の豫定で、全部の價格は約八〇馬克とのことである。

Eibl, H.:—D. Grundlegung d. philos. Denkens im Abendlande. Griech. u. christl.-griechische Philos. d. Patristik. (D. Philos. Ihre Gesch. u. ihre Systematik, Abt. 1)

Bonn: Hanstein. VI, 202 S. M. 6.50

Gent, W.:—Das Problem d. Zeit. H. hist. u. systemat. Untersuch. Frankfurt a. M.: Schulte-Bumke. 187 S. M. 9.00

Grahnmann, M.:—Stud. ü. d. Einfluss d. aristotel. Philos. auf d. mittelalterl. Theorien ü. d. Verhältnis v. Kirche u. Staat. (Stz.-Ber. d. Bayer. Akad. d. Wiss. Philos.-hist. Abt. Jahrg. 1934, Hr. 2) München: Beck. 161 S.

Grimwald, E.:—D. Problem d. Soziologie d. Wissens. Versuche e. krit. Darst. d. wissenschaftl. Theorien. Hrg. v. W. Eckstein. Wien u. Lpz.: Braunnüller. VIII, 279 S. M. 7.50

- Haeberlin, P.:—D. Wesen d. Philos. I. Einführung. München: Reinhardt. 224. S. M. 5.50
- Heinsooth, H.:—Die sechs grossen Themen d. abendl. Metaphysik u. d. Ausgang d. Mittelalters. 2. Aufl. Bln.: Junker u. Dünnhaupt. 310 S. M. 8.00
- Kant, I.:—Gesammelte Schriften.** Hrsq. v. d. Preuss. Akad. d. Wiss. Bd. 10: Abt. 3: Handschriftl. Nachlass, Bd. 6. Bln. u. Lpz.: W. de Gruyter. XIII, 657 S. M. 40.00
- Nestle, W.:—Griech. Religiosität v. Alexander d. Gr. bis auf Proklos. (Slg. Grätschen, 1080) Bln. u. Lpz.: W. de Gruyter. 100 S. M. 1.63
- Paul, his heritage and legacy, by Kirsopp Lake. Lond.: Christophers. 133 pp. 6s.
- Schiffner, V.:—D. Problem d. Raumes u. d. Zeit u. d. Vorstellung d. realen Unendlichkeit. Lpz.: Voigtländer. 176 S. M. 5.60
- Schmidt, W. P.:—Ursprung d. Gottesidea. E. hist.-krit. u. positive Stud. Bd. 5: Abt. 2: D. Religionen d. Urvölker Amerikas, Asiens u. Australiens. Münster i. W. Aschendorff. XXVIII, 921, S. M. 27.00
- Thomas von Aquin:—Summa theologica. D. deut. Thommsausgabe. Bd. 25: Die Menschenwerdung Christi. (In d. Iersch.folge 2) Salzburg. u. Lpz. A. Pustet.
- Thunrossen, Ed.:—D Kraft d. Geringen. 3 Predigten. (Theol. Existenz heute, Ht. 8) München: Kaiser. 28 S. M. 0.50

變 編 畧 四

Revue philosophique de la France et de l'étranger.

59. Année, Nos. 5/6. Mai-juin, '34.

E. Meyerson: *Les mathématiques et le divers*; R. Bespaloff: *Notes sur La Répétition de Kierkegaard*; C. Schurer: *La vie esthétique et le problème de la connaissance*; P. Jacobson: *La psychologie de l'acteur*; H. Pons: *Monza, étude sur l'esthétique de Platon* (Suite).

Philosophical Review. Vol. 43, No. 3, May, '34.

Kalsh W. Church: *Identity and implication*; V. G. McGill: *The realm of universals*; Benjamin Grinburg: *Probability and the philosophic foundations of scientific knowledge*; Katharine Gilbert: *The relation of the moral to the aesthetic standard in Plato.*

☆

Revue d'histoire de la philosophie et d'histoire générale de la civilisation. N. S. Fasc. 5, Jan. '34.

F. Préchac: *Autour du De Clementia*; Ch. Guerlin de

Guer: La langue et le style de saint Francois de Sales; C.
Becker: L'oeuvre d'art selon Eugene Delacroix; Léon Mils:
La forme du Zarathustra de Nietzsche.
Hermes. Bd. 69, Hf. 2.

E. Wolf: Das geschichtliche Verstehen in Tacitus Germania.
(服部英次郎輯)

彙報

哲學茶話會

六月十九日(火)午後七時半より樂友會館に於て

高次の方向量の論理的意義

佐藤 省三君

印哲佛敎學會

六月二十日(水)午後七時より樂友會館に於て

印度大乘に於ける縁起論の展開

花田凌雲講師

心理學讀書會

第一回 五月十日(木)

犯罪心理について

中山 覺氏

第二回 五月十七日(木)

鼠の迷路運動に對する癡醉劑の影響

樋口 榮氏

第三回 五月二十四日(木)

關係把握の研究 —— 事實及び學說の史的考察 ——

佐藤 幸治氏

第四回 五月三十一日(木)

新生兒心理學の現況及びサツカリン刺戟の吸啜運動に及ぼす影響

關原 太郎氏

第五回 六月七日

言葉なき思考作用

毛利 敦丸氏

第六回 六月十四日

教育的心理學の概念につき教を乞ふ

辻本 延二氏

第七回 六月二十一日

精神異常兒の保護について

安藤 守元氏

第八回 六月二十八日

John Dewey: Creative Intelligence
修辭法「互文」の紹介とその研究

廣部 重雄氏
阿部孫四郎氏

倫理學讀書會

五月二十五日(金)午後三時より第二演習室に於て

Kant に於ける Die Würde der Menschheit

金澤初太郎君

六月八日(金)午後三時より第二演習室に於て

Droysen: Grundriss der Historik

中林嘉太郎君

六月十五日(金)午後三時より第二演習室に於て

孔子の道德論

龍野健次郎君